opusdei.org

属人区長の書簡 (2009年11月)

司祭年は、すべてのキリスト者が自分の人生を通して、他の人生を通して、他の人名とを思い出させてであることを思い出さが、この点がの目的であるでしょう。この中心的な人区長の可な書簡の中です。

2009/11/11

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

司祭年中の11月を始めるにあたり、 教会の司祭的性格を顕著に示す二つ の典礼祭日、すなわち、諸聖人の祭 日と王であるキリストの祭日につい て考えてみたいと思います。今日祝 う諸聖人の祭日においては、キリス トの祭司職が教会の成員であるキリ スト者において表され、22日の王た るキリストの祭日には、私たちの 頭、イエス・キリストが「永遠の祭 司、宇宙の王|[i]であることが示さ れます。主は、世の終わりに栄光の うちに来臨し、ご自分の国の王位に 着き、神なる御父にそれをお渡しに なるのです[ii]。

この二つの祭日はキリスト者として の召し出しが持つ尊厳について考察 するよう促します。聖ペトロはその 第一の手紙で、洗礼を受けた私たち に対して次のように述べています。 「あなた方は選ばれた民、王のもた を引く祭司、聖なる国民、神のもの となった民です。それは、あなた方

を暗闇中から驚くべき光の中へと招 き入れてくださった方の力ある業 を、あなた方が広く伝えるためなの です。あなた方は、かつては神の民 ではなかったが、今は神の民であ り、憐れみを受けなかったが、今は 憐れみを受けている。」[iii] 使徒の 頭は、神が私たちを聖霊の恩恵でご 自分の子供になさるにあたり、新し い神の民である教会の一員としてく ださることを強調しています。それ は血縁によるのではなく、イエス・ キリストに属することによって実現 されることです。キリストの祭司職 に与るという、無償であり相応しく もない、この信じがたい選びの効力 によって、模範と言葉と業で素晴ら しい神のみ業を告げ知らせるよう私 たちは招かれているのです。

父なる神の優しさに感嘆し、感謝しましょう。私たちを救おうと御子をお送りになるだけで満足なさらずに、世の終わりまで全ての人類に贖

いの恵みをもたらすために、キリス トの体である教会をお建てになりま した。この教会を通して、時空を超 えて主の救いが実現されるのです。 聖アウグスティヌスはこう強調しま した。「洗礼を受けた全ての人を、 唯一の注油に与るがゆえにキリスト 者と呼ぶように、皆が唯一の司祭の 成員であるがゆえに、皆を司祭とも 呼ぶのです。」[iv] 創立者はこの偉 大な賜を深く考察し、皆がキリスト と同じ思いを抱くようにと促されま した[v]。それゆえ私たちは考えなけ ればなりません。私はどの程度この 賜を自分のものとするよう努力して いるだろうか、と。

聖性と使徒職への普遍的な招きは、 根本的には洗礼の霊印に由来してい ます。共通の祭司職は位階的祭司職 に先行します。そして後者は前者に 仕えるためのものです。洗礼による 再生なしに、聖なる祭司職はあり得 ません。というのもこの秘跡は他の 秘跡の入口だからです。と同時に、 職位的な祭司職がないなら、私たち は聖性の道において前進することが できません。教会はこの司祭職を通 してキリストの教えを人々に告げ知 らせ、秘跡、特にご聖体の秘跡に よって人々をキリストの命に結びつ け、天国へと導くからです。「信者 の共通祭司職と職位的または位階的 祭司職とは、段階においてだけでな く、本質において異なるものである が、相互に秩序づけられていて、そ れぞれ独自の方法で、キリストの唯 ーの祭司職に参与している。 | [vi]

アルスの聖なる主任司祭は、活き活きとした表現で職位的祭司職の必要性を説いています。ベネディクト十六世は、司祭年にあたって書かれた手紙の中でこの聖人の言葉を引用しておられます。「司祭がいなければ、主の受難と復活は何の役にも立ちません。…地上で贖いのわざを続けるのは司祭です。… だれも扉を開

く人がいなければ、家が金塊に満た されていても何の役に立つでしょう か。司祭は天の宝を開く鍵を持って います。扉を開くのは司祭です。司 祭は慈しみ深い神の執事であり、神 の善の管理人です。…司祭は、自分 のためにいるのではなく、あなた方 のためにいるのです。」[vii] 聖なる 司祭が欠けることのないように、本 物の信仰をもって、毎日どのように 祈っているでしょうか。私たちのキ リスト者としての身分に求められて いることとして、世界中が必要とし ている働き人をふんだんにお送り下 さい、と麦畑の主にお願いしていま すか。

ここで、神の民、つまり教会の司祭 的性格を強調している今日の典礼に 視線を戻しましょう。黙示録は次の ような印象的な幻視を私たちに示し ています。「あらゆる国民、種族、 民族、言葉の違う民の中から集まっ た、だれにも数えきれないほどの大 群衆が、白い衣を身に着け、手にな つめやしの枝を持ち、玉座の前と小 羊の前に立って、大声でこう叫ん だ。『救いは、玉座に座っておられ るわたしたちの神と、小羊とのもの である。』 | [viii] 至聖三位一体のみ 前で天使たちと共に礼拝している大 群衆は、聖人たちです。知られてい る人たちもいますが、大方は知られ ぬ人たちです。そこには、神の民の 最終的な姿を見ることができ、「義 人アベルと忠実な太祖アブラハムか ら始まる旧約聖書における聖人た ち、新約聖書における聖人たち、キ リスト教初期の数知れない殉教者と 幾世紀にも百る福者や聖人たちか ら、現代のキリストの証人たちまで が含まれています。全員が神の民の 永遠の命である聖霊に促されて、福 音を自分のものにするという思いで 一致しています。| [ix]

職位的祭司職も共通祭司職も、人々を聖化するためのものです。教会の

頭キリストに形づくられる司祭たち は、神のみことばを説き、秘跡を司 り、至高永遠の司祭であるキリスト の見える道具となり、信者を永遠の 命に導く牧者として、聖化の仕事を 実践します。しかし、信徒たちもま た、王としての司祭職の力で、司祭 としてのキリストのこの三つの職務 に独自のやり方で参与します。聖ホ セマリアはこう説明しました。全て のキリスト者は、例外無しに「自己 の存在をつかさどる司祭になりまし た。それは、『キリストによって神 によみせられる霊のいけにえを捧げ るために』(1ペトロ2,5)、そして 神のみ旨に従う精神をもって行動 し、人となられたキリストと同じ使 命を継続するためなのです。 **| [x]**

教会の救霊の使命に参与しようという焦燥感は、教会の権威による特別な任務に着くことを必要とするものではありません。「使徒とは、洗礼によってキリストに接ぎ木され、キ

リストと一致し、堅信によってキリ ストのために戦う力が与えられた信 者のことであり、また信徒の共通祭 司職によって、世界中で行いをもっ て神に仕えるように召されたと自覚 する信者のことであると言えます。 信者の共通祭司職は、キリストの祭 司職にある程度与りますが、職位的 祭司職とは本質的に異なり、共通祭 司職によって信者は教会の典礼に参 与し、言葉と模範、祈りと償いに励 み、それによって神への道を歩む 人々を助ける力を受けるのです。| [xi]

度々、キリスト者としての身分にどんな意味があるのかを考察しましょう。私たちは人々にキリストをもたらし、人々をキリストに導かなければならないのですから。

司祭年の間、司祭の聖性のために祈るだけではなく、全てのキリスト者の聖性のためにも祈らなければなり

ません。両親が子供たちを神の愛の うちに、キリスト者としての生活の 模範を通して教育する家庭があるな ら、また、日常生活の様々な状況に おいてイエス・キリストを真剣に探 し求める人々がいるなら、主から司 祭職に呼ばれていることを感じ取る 若者が多くなるはずです。これから の数ヶ月間は、皆が聖性と使徒職へ の普遍的召し出しをより強く自覚 し、また、凡庸に甘んじたり気分に 左右されたりせずに、この招きに きっぱりと付き従っていくよう細心 の注意を払うための新たな機会を与 えてくれます。私たちは、どのよう に、またどの程度まで、疲れや意に 反することや失敗に影響されている のでしょうか。神の内に逃れること をせずに、簡単に心の平和を失って いないでしょうか。十字架は教会の 礎であり冠であることを考えている でしょうか。

聖ホセマリアは、この世の諸活動に よって神の国が広がるのに役立つ方 法を教えるために、神からの特別の 照らしを受けました。その帰天当 日、オプス・デイの信徒である女性 たちの一グループに、全てのキリス ト者と同じように彼女たちにも〈司 祭的な魂〉のあることを思い起こさ せました。その遙か昔にこう記して います。「私たちは皆いつも、司祭 も信徒も〈真の司祭的な魂と完全な 社会人としての考え方〉を持たなけ ればなりません。それは、神の国の 住民である(エフェソ2,19参照)と 同時に人類社会の住民であることを 弁え、自分の生活が、教会の中で、 また社会的な事柄において、全く自 由である事を理解し実践するためで す。| [xii]

繰り返しますが、〈司祭的な魂〉によって、洗礼を受けた人は日々のミサ聖祭において、また一日中、主と一致することを渇望し、キリストと

同じ思いを持つように導かれます。 司祭的な精神は、私たちの仲間の霊 的物的な善に役立つような具体的な やり方で、誠実に献身する聖なる野 心を育みます。また、使徒職の熱意 をかき立て、聖母に一致し、教皇に 子として寄り添い、キリストの共同 贖い者になることを強く望ませ、 個々人の、また全ての人たちの罪を 償う覚悟を持つよう促します。つま り、神と隣人への愛ゆえに、教会と 人々に仕えることにおいては、決し て〈もう充分〉と言わないというこ とです。聖ホセマリアはそれを次の ように要約しています。「皆のため に主に願っているこの司祭的な魂に よって、日常のやるべき事柄を通し て、全生活を絶えず神を誉め称える ものにしなければなりません。絶え ず祈り、僧いを捧げ、全ての人々の ために願い、犠牲を捧げることで す。全てこれらのことを、祭壇上の 聖なるいけにえ、ミサ聖祭における

キリスト・イエスとのいつもの親密 な一致のうちにおいて。」[xiii]

ミサ聖祭は私たちの仕事に永遠の価 値を与えてくれます。ミサ聖祭にお いてキリスト者は、自分の人生と全 活動を捧げることを通して、イエス と協力して人間の諸現実を聖化する という役割を、全面的に自覚するよ うになります。Altare Dei est cor nostrum [xiv] 神の祭壇は私たちの心 である、と大聖グレゴリオは言いま した。「私たちは祭壇においてだけ ではなく、全世界において主に仕え なければなりません。世界が私たち の祭壇なのです。人々の全ての仕事 は祭壇のようになり、皆さん一人ひ とりは、観想的な心を持って働くが ゆえに、〈ミサをたてる〉と言えま す。それは、24時間続くものであ り、翌日のミサへとまた24時間続い ていき、こうして一生の最後まで続 くのです。| [xv]

同じように、キリストの王職への参与は、この世の諸現実を聖化するようにキリスト者を力づけます。具体的に、信徒はこの世の諸問題を神のみ旨に沿って秩序づけようと専念のようとで通して[xviii]、自己の全でく、自己の介ン種として働き[xviii]、それを実現していきます。ドン・アルバロが聖ホセマリアの教えに従って

こう説明されました。「洗礼によって受ける共通の祭司職は王の祭司職です(1ペトロ2,9)。私たち自身と自分のもの、また神のみ旨にかなった気高い人間的な営みを全て神にお捧げするとき、私たちはキリストの王国となり、主と共に支配するからです。」[xix]

聖ホセマリアは、神から特別の使命 を与えられた者として、オプス・デ イの精神に沿ってキリストの司祭職 を表す根本的な特徴を教えました。 それは、司祭職に就いている人も信 徒も、その世俗的性格と社会におけ る身分とに相応しい〈社会人として の考え方〉を持つということです。 こうして、司祭と信徒は、それぞれ が頂いた賜に従い、一人ひとりに固 有な立場を尊重しつつ、教会の唯一 の使命を遂行するために協力するこ とができるのです。信徒は現世の枠 組みの中で、それをキリストの精神 で潤しつつ、その使命を実践しま

す。司祭は、みことばの宣教と秘跡を司ることを通して、人々に仕えます。聖ホセマリアが記していることによって、「司祭は信徒の、信徒は司祭せん。「司祭は社会人の事柄に入り込んではならないし、信徒はおらないし、信徒はおらないです。」[xx]

11月28日は、オプス・デイが属人区 として設立された記念日です。神に 感謝し、教会の使命に参与するため に、オプス・デイにおける司祭と信 徒の有機的な協力が持つ神学的霊的 に深い意味を、知らせ広めるように 努めましょう。それは何よりも、キ リスト者としての首尾一貫した生活 という証、すなわち、使徒が言うよ うに、一人ひとりが「召された身分 に」[xxi]留まり、司祭は100%司祭と して、信徒は100%信徒として生きる ことです。こうして、いつもそう努

めているように、私たちは教会に実り豊かな奉仕をすることができます。それは、世俗主義一現世的なとする一はい払おうとする一でとなる現代においては、といる現代においては、教皇がはっているです。そしておられる[xxii]、全な世俗的精神を推進していきましょう。

 さるように願いましょう。さらに、 私たちに先立った全ての人たちの助 けにも頼ることができます。今月 は、私たちの祈りと死者のための償 いを通して、勝利の教会と清めの教 会と戦いの教会の一致がより強くな るようにしましょう。

心からの愛を込めて祝福を送ります。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2009年11月1日

[i] ローマ・ミサ典礼書、王であるキリストの祭日の序唱

[ii] 1コリント15,24参照

[iii] 1ペトロ2,9-10.

[iv] 聖アウグスティヌス『神の国』 20.10(CCL48.720). [v] フィリピ2,5参照

[vi] 第2バチカン公会議『教会憲章』 10

[vii] 聖ヨハネ・マリア・ビアンネ (ベネディクト十六世2009年6月16 日『司祭への手紙』中の引用)

[viii] 黙示録 7,9-10.

[ix] ベネディクト十六世、2006年11 月1日諸聖人の祭日の説教

[x] 聖ホセマリア『知識の香』96

[xi] 同上120

[xii] 聖ホセマリア、1945年2月2日手 紙1

<u>[xiii]</u> 聖ホセマリア、1955年3月28日 手紙4

[xiv] 大聖グレゴリオ、Moralia 25,7,15(PL 76,328). [xv] 聖ホセマリア、1968年3月19日 の説教の註

[xvi] マタイ 28,19-20.

[xvii] 第2バチカン公会議『教会憲章』31参照

[xviii] 第2バチカン公会議『信徒使徒職に関する教令』2参照

[xix] ドン・アルバロ・デル・ボル ティーリョ、1993年1月9日司牧書簡 11

[xx] 聖ホセマリア、1954年3月19日 手紙21

[xxi] 1コリント7,20.

[xxii] ベネディクト十六世、2006年5 月18日及び2007年6月11日の講演参 照 pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2009nian-11yue/ (2025/12/10)